

決算プレゼンテーション資料

2026年3月期 第3四半期



2026年1月30日

広報・IR室の田仲でございます。本日は、よろしくお願いいたします。

はじめに、連結決算概要について、説明いたしますので、
プレゼンテーション資料の3ページをお願いします。

■ 免責事項

本資料の数値のうち、過去の事実以外の当社グループの計画、方針その他の記載にかかわるものは、本資料の発表日現在において入手可能な情報等に基づいて作成したものであります。しかしながら、当社グループの事業展開上リスクとなる可能性がある要素が複数存在しており、実際の業績等は大きく異なる可能性があります。

また、利息返還請求の動向は、外部環境の変化等に影響を受けやすいことから不確実性が高く、その影響として利息返還損失引当金繰入額を計上する場合があります。

最終の業績はこれらのリスクを含むさまざまな要因によって予想数値と異なる可能性があります。

■ 本資料における表記

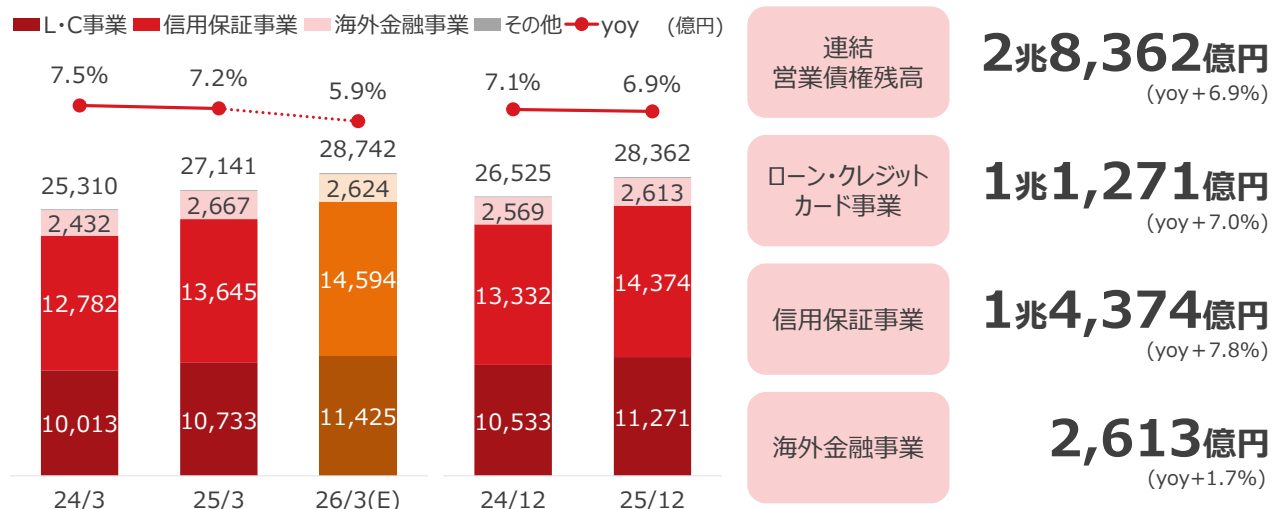
L・C事業	ローン・クレジットカード事業
MUCG	エム・ユー信用保証
yoy	前年同期比または前期比
ytd	前期末比
(E)	見通し
EB, EASY BUY	EASY BUY Public Company Limited
ACF	ACOM CONSUMER FINANCE CORPORATION
ACM	ACOM (M) SDN. BHD.

■ 本資料に関するお問い合わせ

アコム株式会社 広報・IR室
☎ (03)6865-6474
✉ ir@acom.co.jp

連結決算概要(業容)

- 国内事業の追加利用が好調だったことにより、順調に業容拡大
- 連結営業債権残高は、前年同期比+6.9%の2兆8,362億円



3

右側の営業債権残高ですが、
連結全体では、前年同期比6.9%増加の2兆8,362億円となりました。

増加した要因は2つあります。

1つ目は、国内事業において、既存のお客さまの追加利用が好調に推移したこと、
2つ目は、海外金融事業において、円安の為替影響が残高を押し上げたことです。

その下、営業債権残高を事業別に見ますと、
ローン・クレジットカード事業は前年同期比7.0%増加の1兆1,271億円、
信用保証事業は7.8%増加の1兆4,374億円、
海外金融事業は1.7%増加の2,613億円となりました。

4ページをお願いします。

連結決算概要(業績)

(百万円、%)

	2024/12 実績	2025/12 実績	yoy	2026/3 計画	yoy	進捗率
1 営業収益	236,825	251,268	6.1	331,800	4.4	75.7
2 ローン・クレジットカード事業	126,812	136,312	7.5	179,900	6.1	75.8
3 信用保証事業	56,436	60,006	6.3	80,800	5.9	74.3
4 海外金融事業	48,699	49,498	1.6	64,100	-2.0	77.2
5 営業費用	162,145	169,283	4.4	243,200	-6.2	69.6
6 金融費用	4,250	5,371	26.4	7,200	25.3	74.6
7 貸倒関連費用	79,499	81,057	2.0	111,800	5.8	72.5
8 利息返還費用	-	-	-	8,300	-79.3	-
9 その他の営業費用	78,395	82,853	5.7	115,900	7.6	71.5
10 営業利益	74,679	81,984	9.8	88,600	51.3	92.5
11 経常利益	74,965	82,196	9.6	88,900	50.9	92.5
12 税金等調整前当期純利益	74,837	82,433	10.1	88,900	51.6	92.7
13 当期純利益	50,300	72,531	44.2	76,100	108.1	95.3
14 親会社株主に帰属する当期純利益	46,915	68,688	46.4	72,200	124.8	95.1

4

続きまして、業績について、説明いたします。

1行目、連結営業収益は前年同期比6.1%増収の2,512億円となりました。

事業別に見ますと、

ローン・クレジットカード事業は業容拡大を主因に前年同期比7.5%増収の1,363億円、信用保証事業は業容拡大により、6.3%増収の600億円、海外金融事業は円安の為替影響を受け、1.6%増収の494億円となりました。

連結営業費用は前年同期比4.4%増加の1,692億円となりました。

費用別に見ますと、金融費用が前年同期比26.4%増加の53億円、貸倒関連費用が2.0%増加の810億円となりました。

その他の営業費用は、人件費や手数料の増加を主因に、5.7%増加の828億円となりました。

金融費用、貸倒関連費用については後ほど説明いたします。

以上の結果、営業利益は前年同期比9.8%増益の819億円、親会社株主に帰属する当期純利益は、46.4%増益の686億円となりました。

当期純利益が大幅な増益となった要因は、

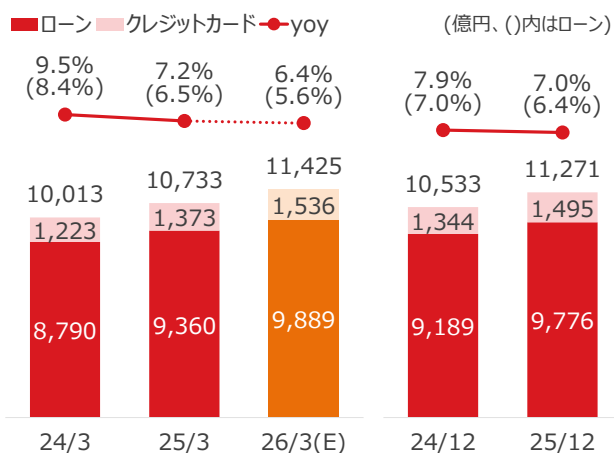
税効果会計における企業分類を「3」から「2」へランクアップしたことで法人税等調整額が利益方向に押し上げられたことによるものです。

続きまして、ローン・クレジットカード事業の概況について、説明いたしますので、5ページをお願いします。

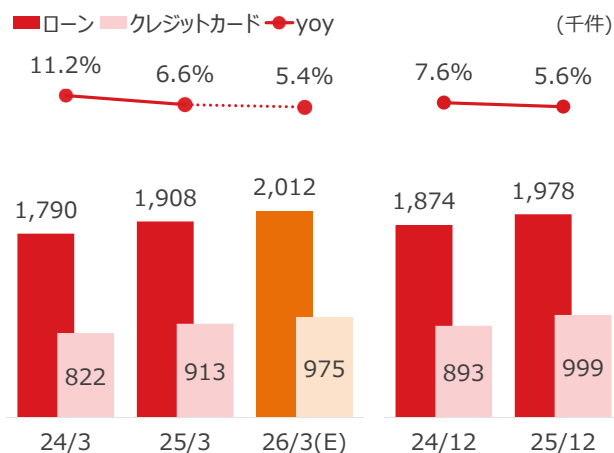
ローン・クレジットカード事業 | 業容

- 既存顧客の利用が好調であったことから、営業債権残高は前年同期比 + 7.0% の 1 兆 1,271 億円
- 利用者は同 + 5.6% の 1,978 千件

■ 営業債権残高



■ 利用者数*



* クレジットカード事業の利用者数は、有効会員数

5

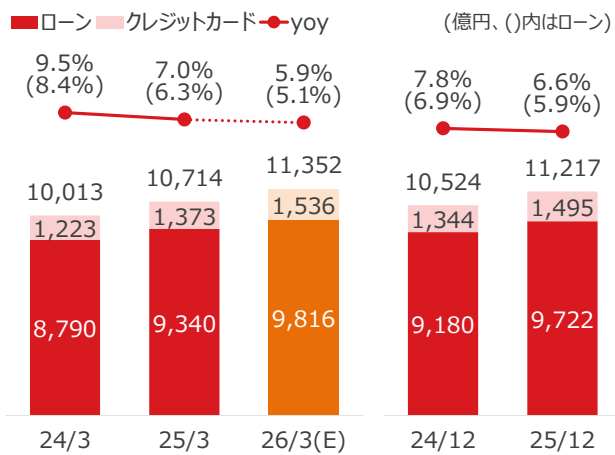
左側の営業債権残高は、雇用・所得環境の改善が続くなか、レジャー・旅行、外食などの資金ニーズの活況な動きが継続し、追加利用が好調に推移した結果、ローン残高9,776億円、クレジットカード残高1,495億円、合計で前年同期比7.0%増加の1兆1,271億円となりました。

7ページをお願いします。

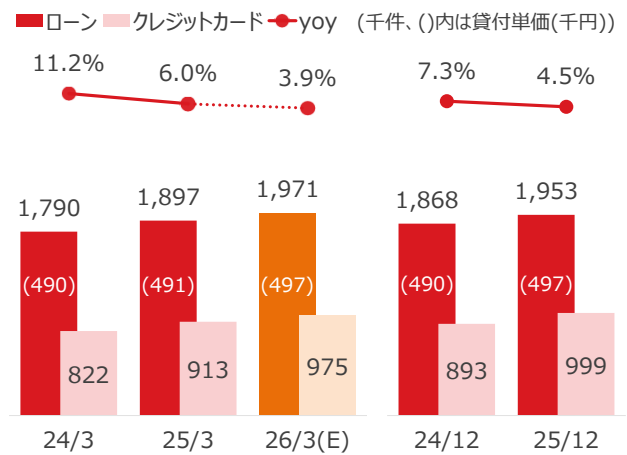
ローン・クレジットカード事業 | 業容(アコム)

- 既存顧客の利用が好調であったことから、営業債権残高は前年同期比 + 6.6%の1兆1,217億円
- 利用者は同 + 4.5%の1,953千件

■ 営業債権残高



■ 利用者数*

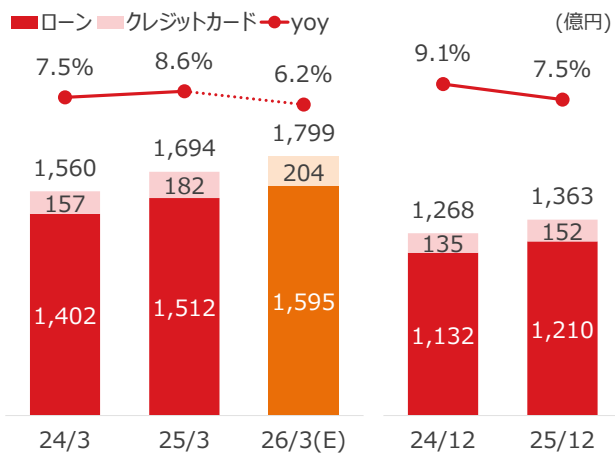


* クレジットカード事業の利用者数は、有効会員数

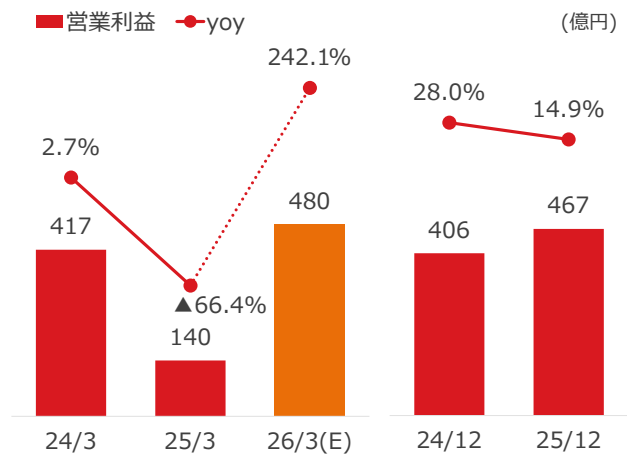
ローン・クレジットカード事業 | 業績

- 営業収益は業容拡大を主因に、前年同期比+7.5%の1,363億円
- 営業利益は、同+14.9%の467億円

■ 営業収益



■ 営業利益



7

左側の営業収益は営業債権残高が順調に増加したことから、前年同期比7.5%増収の1,363億円となりました。

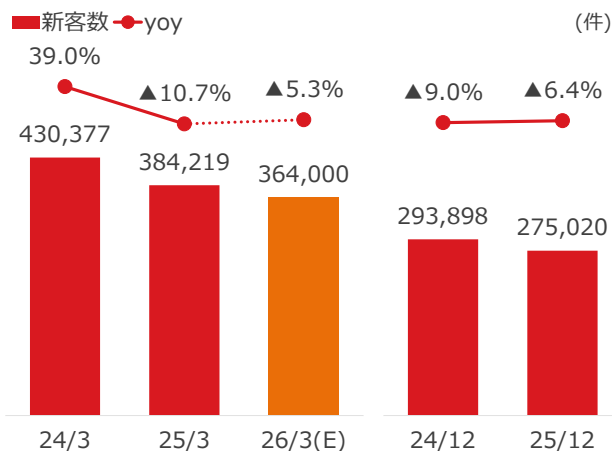
右側の営業利益は貸倒関連費用の減少により、前年同期比14.9%増益の467億円となりました。

8ページをお願いします。

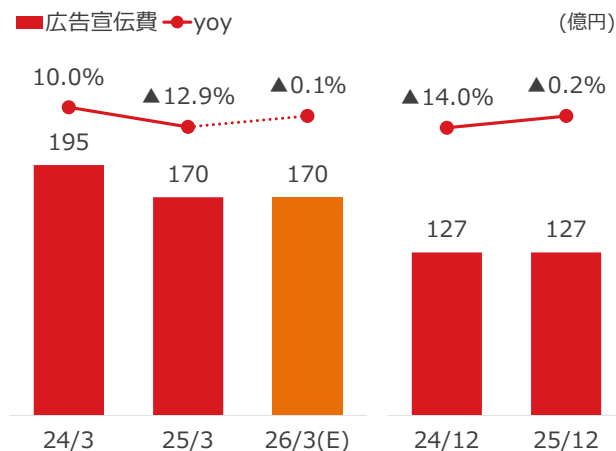
ローン・クレジットカード事業 | 新客数(アコム)

- 新客数は、前年同期比▲6.4%の275,020件
- 広告宣伝費は、同▲0.2%の127億円

■ 新客数(無担保)



■ 広告宣伝費(アコム)



8

左側の新客数はペントアップ需要の影響が剥落したことで、前年同期比6.4%減少の275,020件となりましたが、年間計画の36万4千件の達成に向けては、順調に進捗しております。

右側の広告宣伝費は前年同期比ほぼ横ばいの127億円となりました。新客数が減少している中で、広告宣伝費が横ばいとなった要因は、前期と比較して資金需要が落ち着いてきている中で、新規獲得環境において競争が起こり、アフィリエイト広告の単価が上昇しているためです。

記載はございませんが、1件あたりの新規獲得単価は4万6千円となっております。広告宣伝費につきましては、期末に向け更なる新規獲得を目指し、戦略的に投下する予定です。計画比数億円程度上振れて着地する見込みです。

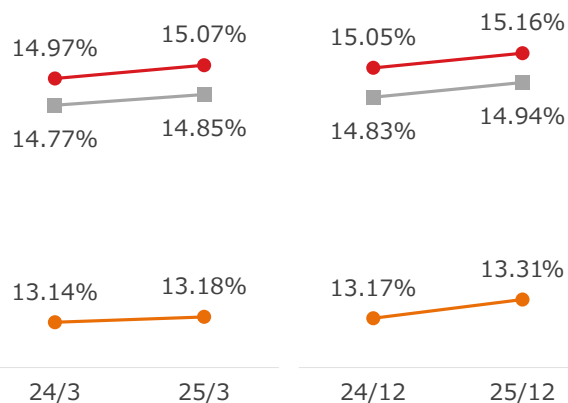
9ページをお願いします。

ローン・クレジットカード事業 | 利回り・貸倒損失(アコム)

- ローン・クレジットカード事業の期中平均利回りは、前年同期比 + 11bpsの14.94%
- 貸倒損失率は、同 ▲ 15bpsの3.59%

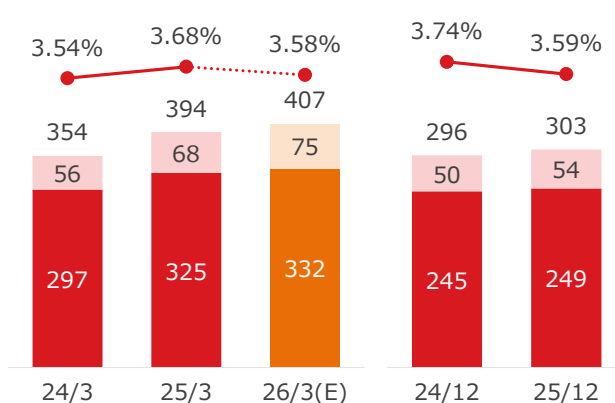
■ 期中平均利回り*1

● ローン ● クレジットカード ■ ローン・クレジットカード



■ 貸倒損失額・損失率*2

■ ローン ■ クレジットカード ● 貸倒損失率*3 (億円)



*1 クレジットカードにおける利回りはリボルビング残高と手数料より算出 *2 貸倒損失額及び損失率は利息返還請求に起因する債権放棄分を除く *3 貸倒損失率の24/12及び25/12は年率換算

9

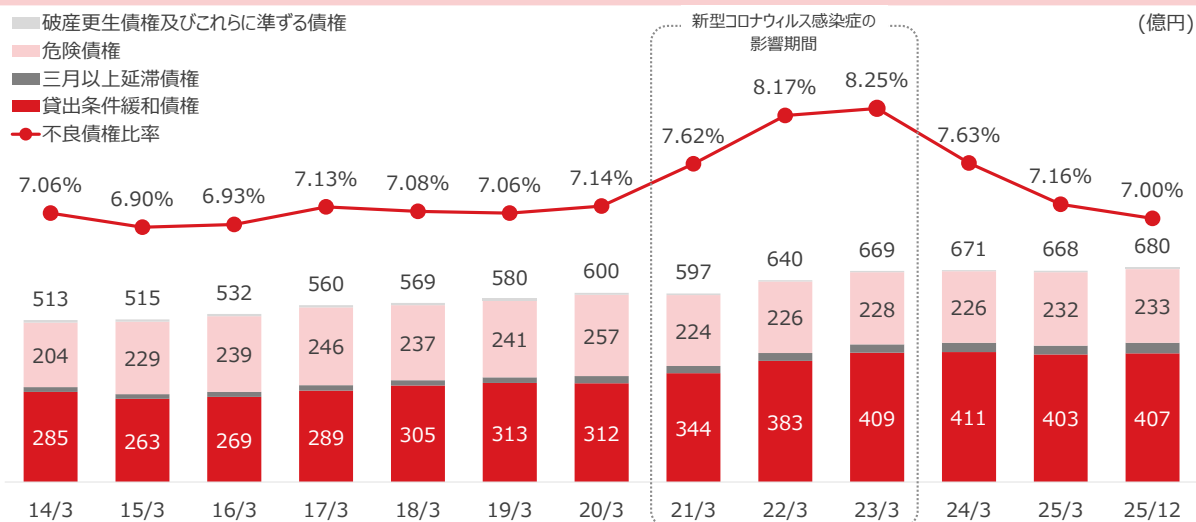
左側の期中平均利回りは、ローン・クレジットカード事業全体では前年同期比11bps上昇の14.94%、ローン事業は11bps上昇の15.16%となりました。

この要因は、お客さまの利用単価が上昇し、利息収入が増加したことです。

10ページをお願いします。

ローン事業 | 不良債権

- 不良債権残高は、680億円
- 債権の良化に伴い、不良債権比率は7.00%まで低下



10

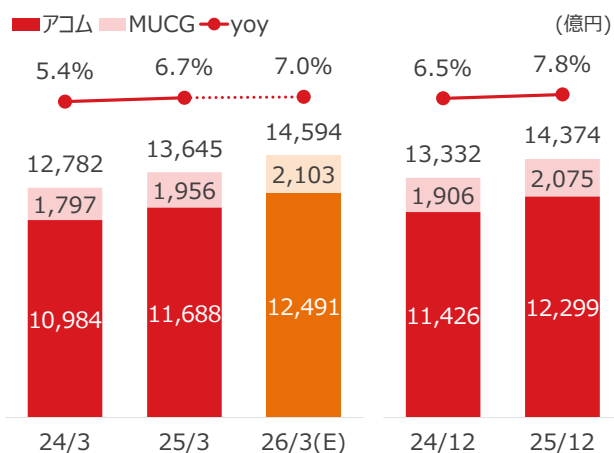
不良債権残高は、前期末比12億円増加の680億円、
不良債権比率は16bps低下の7.0%となり、引き続き債権の良化が進んでいます。

続きまして、信用保証事業について説明しますので、11ページをお願いします。

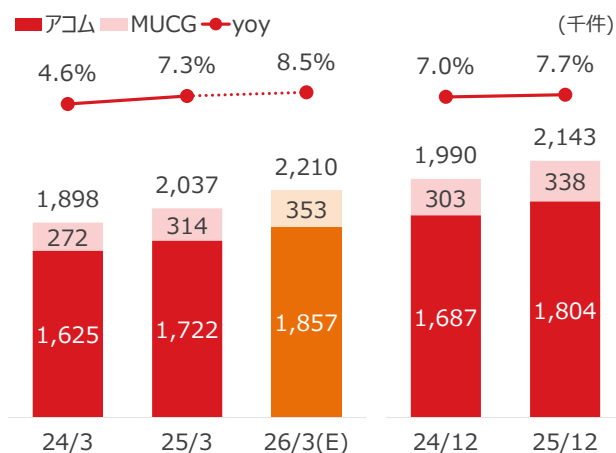
信用保証事業 | 業容

- 新規顧客及び既存顧客の利用が好調であったことから、信用保証残高は前年同期比 + 7.8% の 1 兆 4,374 億円
- 利用者数は同 + 7.7% の 2,143 千件

信用保証残高



利用者数



11

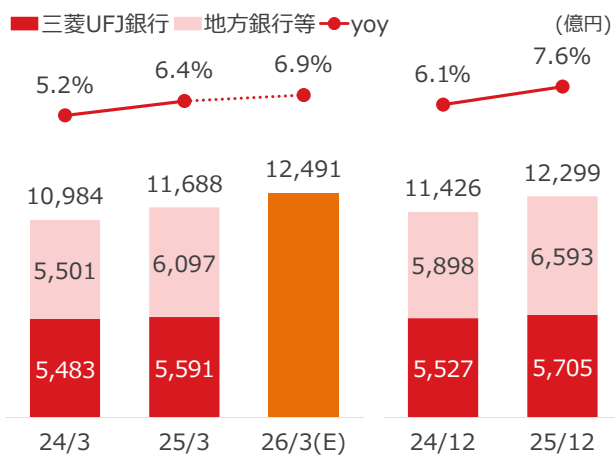
左側の信用保証残高は、ローン・クレジットカード事業と同様に、資金ニーズの活況な動きが継続したことで、新規利用・追加利用が好調に推移した結果、アコム1兆2,299億円、エム・ユー信用保証2,075億円、合計で前年同期比7.8%増加の1兆4,374億円となりました。

13ページをお願いします。

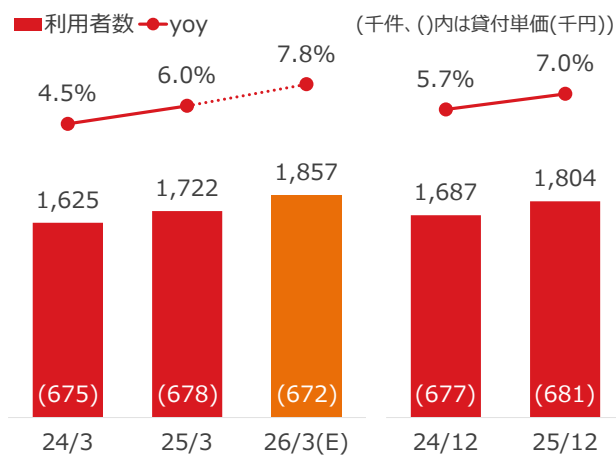
信用保証事業 | 業容(アコム)

- アコム単体の信用保証残高は前年同期比 + 7.6%の1兆2,299億円
- 利用者は同 + 7.0%の1,804千件

信用保証残高



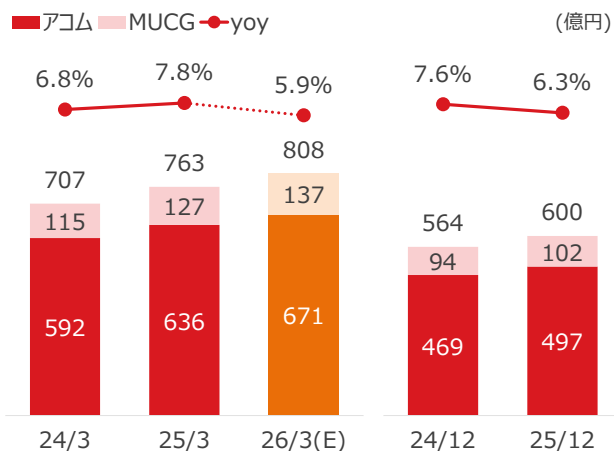
利用者数



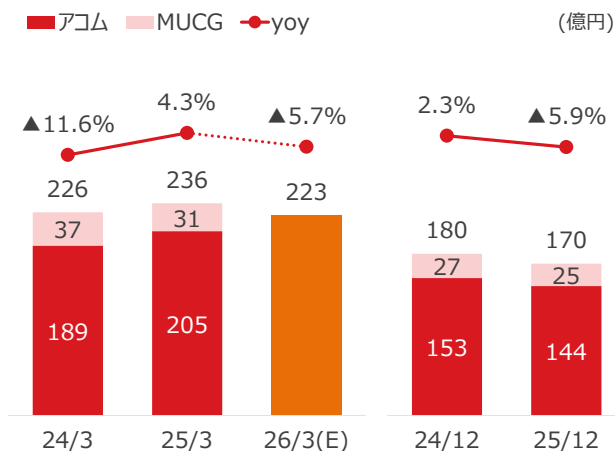
信用保証事業 | 業績

- 営業収益は、業容拡大により、前年同期比 + 6.3%の600億円
- 営業利益は、貸倒関連費用の増加を主因に、同▲5.9%の170億円

■ 営業収益



■ 営業利益



13

左側の営業収益は、業容拡大により、アコム497億円、エム・ユー信用保証102億円、合計で前年同期比6.3%増収の600億円となりました。

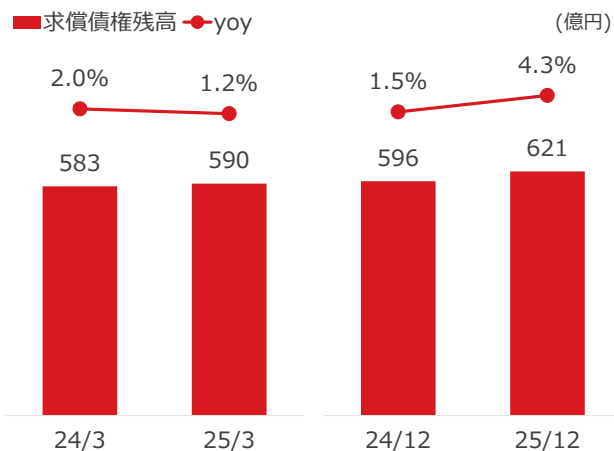
右側の営業利益は、貸倒関連費用の増加を主因に、前年同期比5.9%減益の170億円となりました。貸倒関連費用が増加した要因は、新規集客が好調に推移していることから貸倒発生率の高い取引期間の短いお客さまの構成比が上昇したためです。

続きまして、求償債権と貸倒損失について説明しますので、14ページをお願いします。

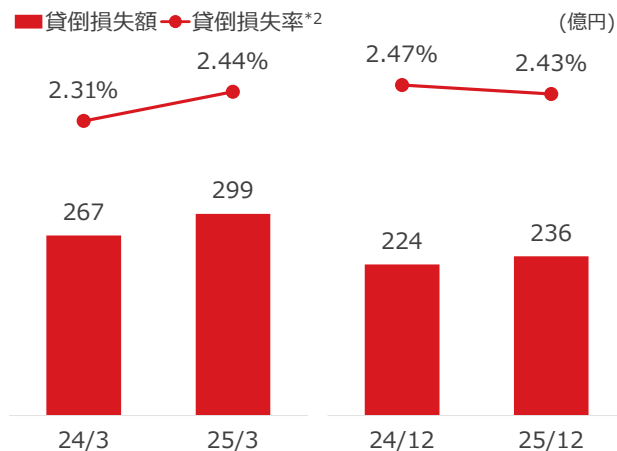
信用保証事業 | 求償債権・貸倒損失(アコム)

- 求償債権は、前年同期比+4.3%の621億円
- 貸倒損失率は、同▲4bpsの2.43%

■ 求償債権残高*1



■ 貸倒損失額・損失率

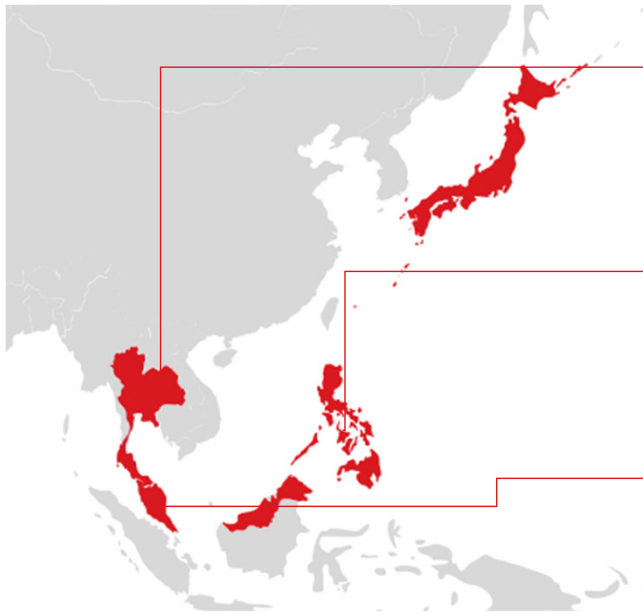


*1 求償債権残高とは、保証履行未償却債権残高 *2 貸倒損失率の24/12及び25/12は年率換算

14

まず、左側の求償債権残高ですが前年同期比25億円増加の621億円となりました。右側の貸倒損失率は前年同期比4bps低下の2.43%、貸倒損失額は12億円増加の236億円となりました。

続いて、海外金融事業の概況について説明しますので、16ページをお願いします。



タイ王国

EASY BUY Public Company Limited

出資比率：71.00%

設立年月：1996年9月

事業内容：無担保ローン事業、インストールメントローン事業

フィリピン共和国

ACOM CONSUMER FINANCE CORPORATION

出資比率：80.00%

設立年月：2017年7月

事業内容：無担保ローン事業

マレーシア

ACOM (M) SDN. BHD.

出資比率：100.00%

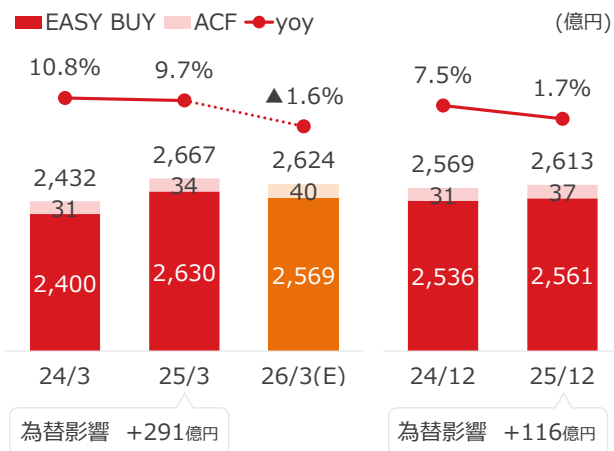
設立年月：2021年7月

事業内容：無担保ローン事業

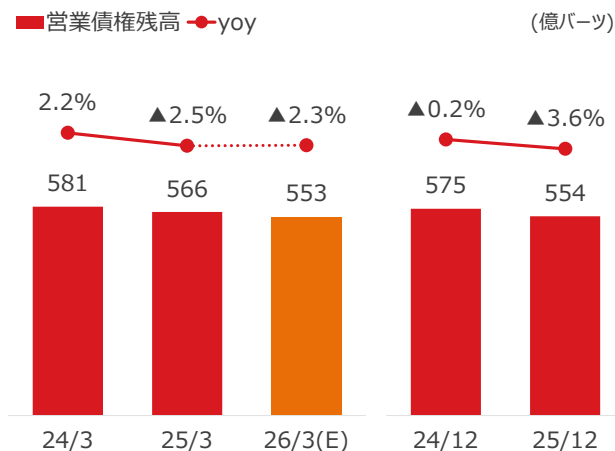
海外金融事業 | 営業債権残高*1

- 営業債権残高(円ベース)は、円安の為替影響により、前年同期比+1.7%の2,613億円
- タイ王国のEASY BUY(現地通貨ベース)の営業債権残高は、同▲3.6%の554億バーツ

■ 海外金融事業(円ベース)*2



■ EASY BUY(現地通貨ベース)



*1 営業債権残高は営業貸付金残高と割賦売掛金残高の合計 *2 為替レート(バーツ) : 4.41円(24/12)、4.62円(25/12)、為替変動 : +0.21円

16

海外子会社は12月決算のため、当第3四半期決算の数値は、2025年9月末時点の業容・業績となります。

左側の海外金融事業の営業債権残高は円ベースで記載しており、前年同期比1.7%増加の2,613億円となりました。
この要因は、円安の為替影響を受けて営業債権残高が116億円押し上げられたことによるものです。

右側にはEASY BUYの営業債権残高を現地通貨ベースで記載しておりますが、こちらは3.6%減少の554億バーツとなりました。

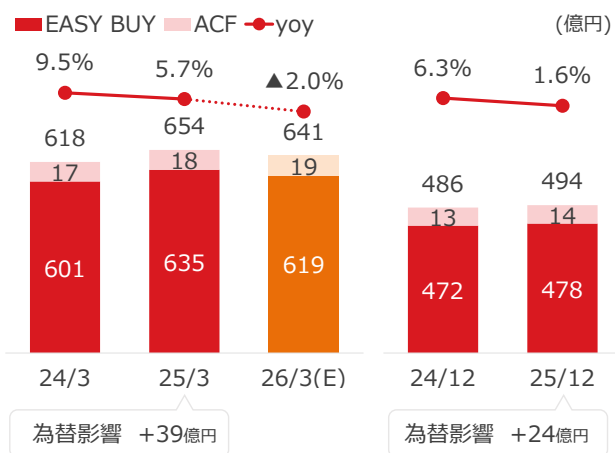
減少した要因は、2017年9月1日に開始された新融資規制の影響を受けている債権の構成比が上昇しており、残高拡大の余地が小さくなっていることです。

17ページをお願いします。

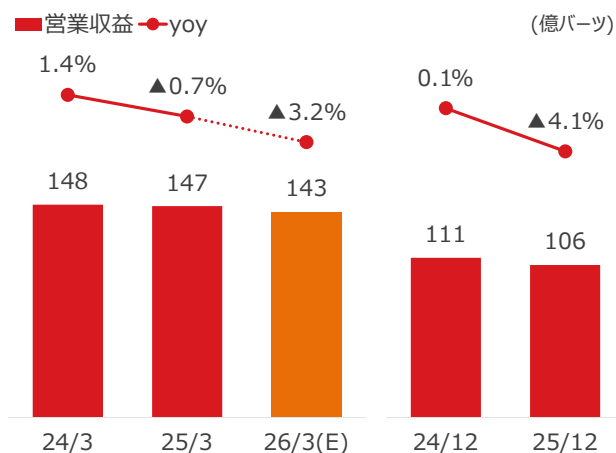
海外金融事業 | 営業収益

- 営業収益(円ベース)は、円安の為替影響により、前年同期比+1.6%の494億円
- EASY BUY(現地通貨ベース)の営業収益は、同▲4.1%の106億パーツ

■ 海外金融事業(円ベース)*1*2



■ EASY BUY(現地通貨ベース)



*1 報告セグメント別の営業収益 *2 為替レート(パーツ): 4.24円(24/12)、4.47円(25/12)、為替変動: 0.23円

17

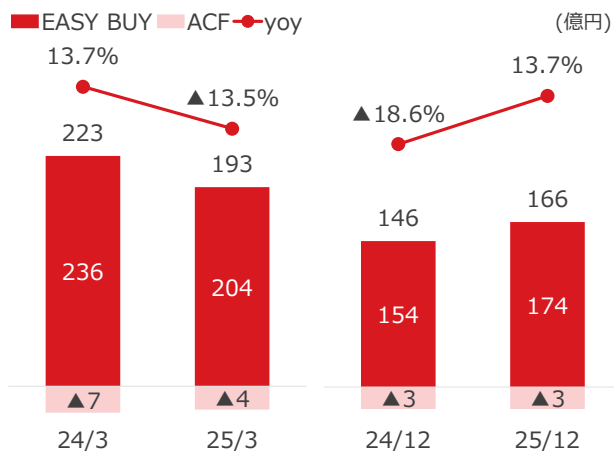
左側の海外金融事業の営業収益は円安の為替影響により、前年同期比1.6%増収の494億円、右側のEASY BUYの営業収益は4.1%減収の106億パーツとなりました。

18ページをお願いします。

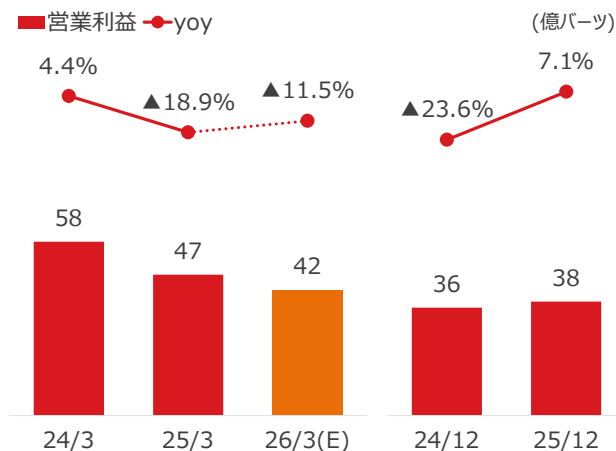
海外金融事業 | 営業利益

- 営業利益(円ベース)は、前年同期比 + 13.7%の166億円
- EASY BUY(現地通貨ベース)の営業利益は、貸倒関連費用の減少を主因に、同 + 7.1%の38億パーツ

■ 海外金融事業(円ベース)*



■ EASY BUY(現地通貨ベース)



* セグメント利益

18

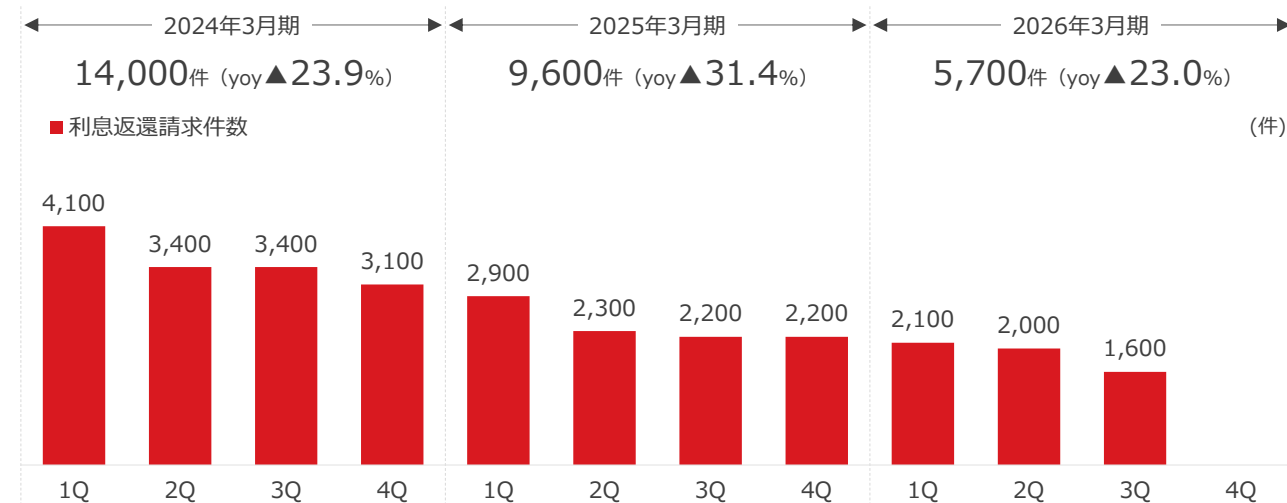
海外金融事業の営業利益は前年同期比13.7%増益の166億円、右側のEASY BUYの営業利益は7.1%増益の38億パーツとなりました。EASY BUYが増益となった要因は、貸倒関連費用が減少したことです。

EASY BUYの貸倒関連費用については、後ほどご説明します。

続きまして、利息返還請求関連について説明いたしますので、19ページをお願いします。

利息返還請求件数*

- 当第3四半期までの請求件数は、前年同期比▲23.0%の5,700件
- 2026年3月期の請求件数は、前期比▲20%程度を予想



* 利息返還請求件数は、弁護士・司法書士受任債権発生件数のうち、当社が利息制限法に基づいて再計算した結果、利息返還金が発生する件数(再受任分を含む)

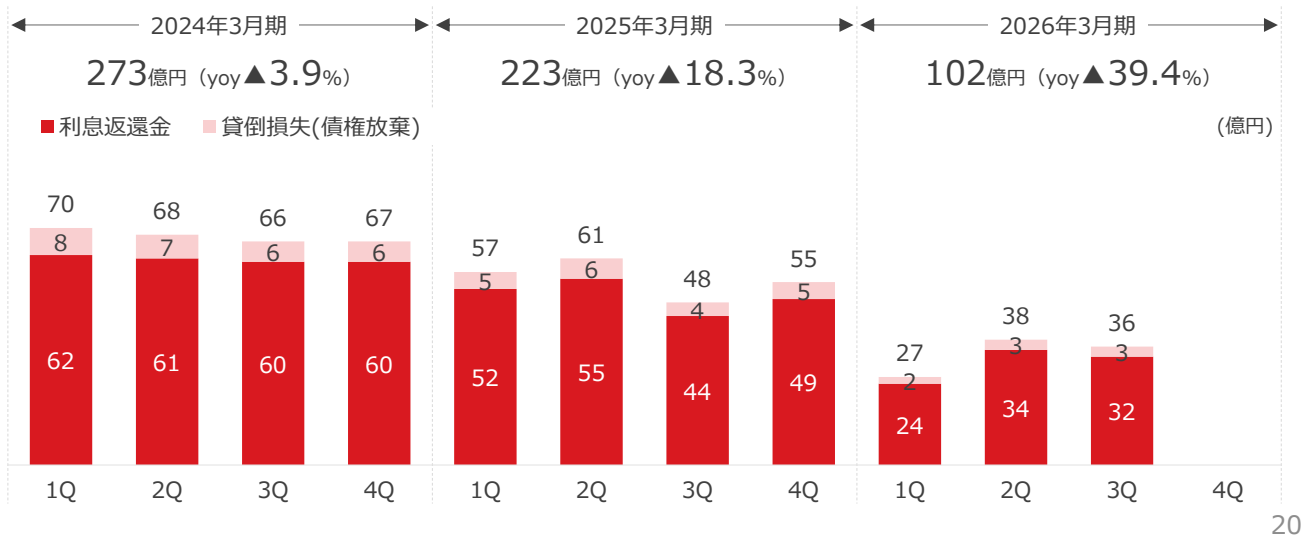
19

利息返還請求件数は、前年同期比23.0%減少の5,700件となりました。
 通期の請求件数は、前期比20%程度の減少を想定しており、
 想定を超える減少となりました。
 期末に向けてもこの水準が続くことを期待しております。

20ページをお願いします。

利息返還損失

- 当第3四半期の取崩しは、前年同期比▲39.4%の102億円
- 引当金残高は377億円
- 2026年3月期の取崩額は前期比▲25%程度を予想



次に利息返還損失について説明いたします。

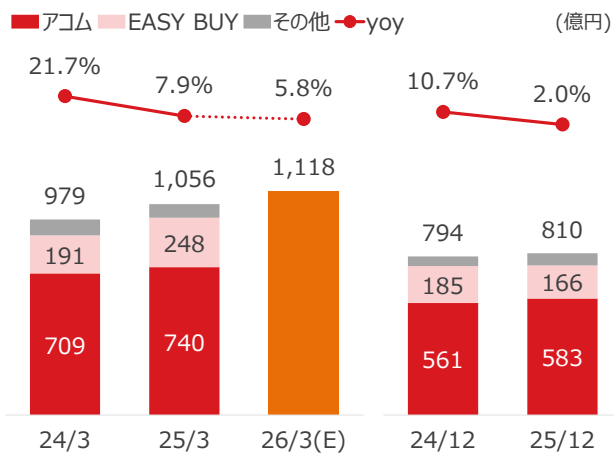
当第3四半期までの利息返還損失引当金の取崩額は前年同期比39.4%減少の102億円と想定以上に減少しています。

続きまして、貸倒関連費用について説明いたしますので、21ページをお願いします。

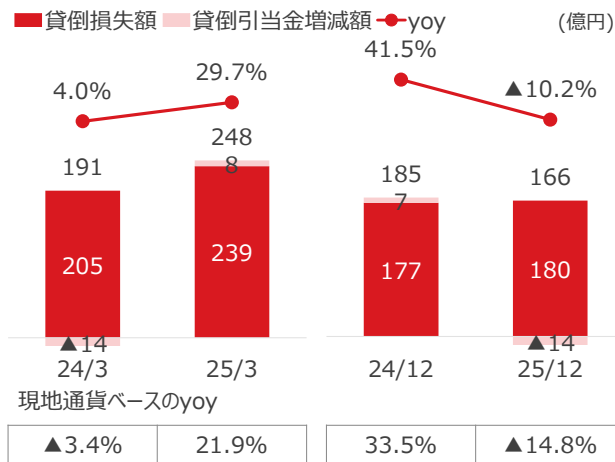
貸倒関連費用

- 貸倒関連費用(連結)は、前年同期比 + 2.0%の810億円
- EASY BUYの貸倒関連費用は、同 ▲10.2%の166億円

■ 貸倒関連費用(連結)



■ 貸倒関連費用(EASY BUY)



21

左側、連結の貸倒関連費用は、アコム単体の増加を主因に前年同期比2.0%増加の810億円となりました。アコム単体の増加要因は後ほど説明いたします。

右側のEASY BUYの貸倒関連費用は10.2%減少の166億円となりました。減少した主な要因は、営業債権残高の減少及び延滞の抑制により、貸倒引当金の戻し入れが発生したことです。

22ページをお願いします。

貸倒関連費用(アコム)

- 貸倒関連費用は、前年同期比+3.8%の583億円
- 貸倒引当金は、業容拡大を主因に、前期末比+44億円の768億円

■ 貸倒関連費用

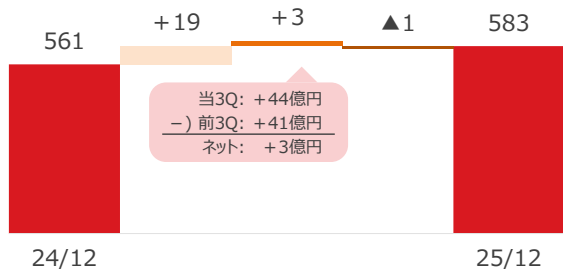
(億円)

■ 貸倒損失
 ■ 貸倒引当金増減額
 ■ 債務保証損失引当金増減額

● yoy

6.8%

3.8%



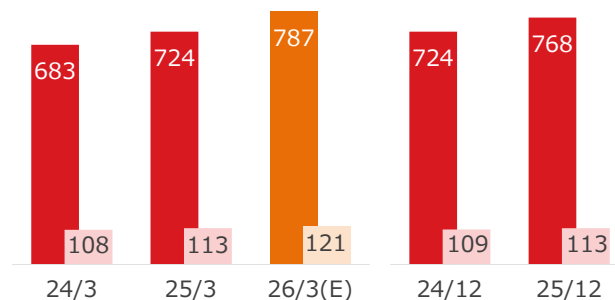
■ 貸倒引当金・債務保証損失引当金

(億円)

■ 貸倒引当金
 ■ 債務保証損失引当金

▲25億円
 yoy +66億円 yoy +41億円

+3億円
 ytd +41億円 ytd +44億円



22

続きまして、アコム単体の状況を説明いたします。

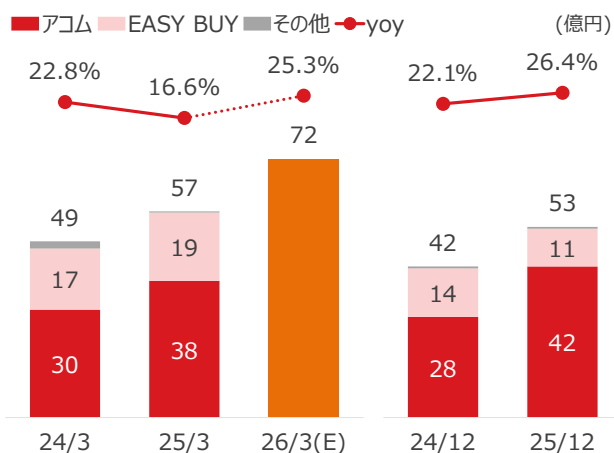
左側の貸倒関連費用は前年同期比3.8%増加の583億円となりました。
増加の要因は、業容拡大により貸倒損失額が19億円増加したことによるものです。

最後に、金融費用について説明いたしますので、23ページをお願いします。

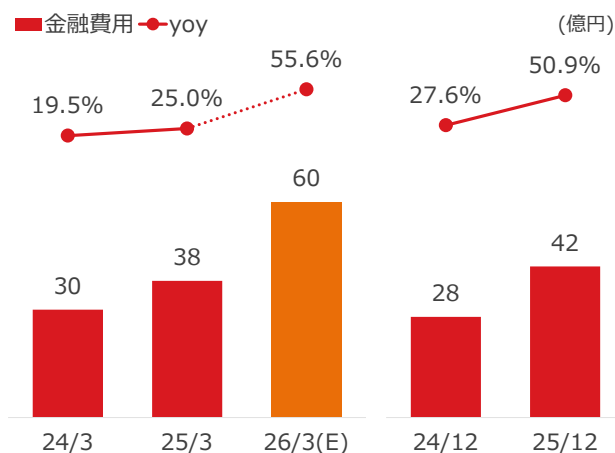
金融費用

- 金融費用(連結)は、前年同期比 +26.4%の53億円
- 金融費用(アコム)は、同 +50.9%の42億円

■ 金融費用(連結)



■ 金融費用(アコム)



23

左側の連結金融費用は前年同期比26.4%増加の53億円、
右側のアコム単体の金融費用は前年同期比50.9%増加の42億円となりました。

金融費用が増加した要因は、二つあります。

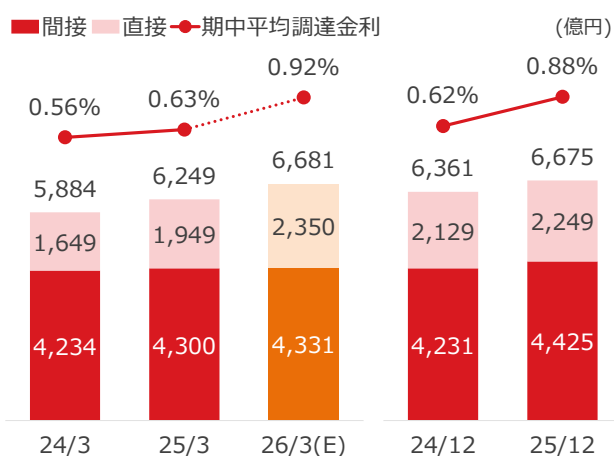
一つ目は、営業債権残高の増加を背景に、資金調達残高が増加したこと、
二つ目は、市場金利の上昇に伴い、調達金利が上昇したことです。

24ページをご覧ください。

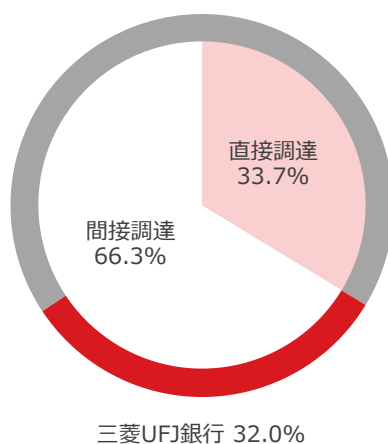
金融費用 | 資金調達残高(アコム)

- 資金調達残高は前年同期比+314億円の6,675億円
- 期中平均調達金利は、同+26bpsの0.88%

■ 資金調達残高



■ 借入先別構成比



固定金利比率
79.6%

長期借入比率
91.0%

1年以内返済予定額
2,929億円

24

左側の資金調達残高は、前年同期比314億円増加の6,675億円、折れ線グラフの期中平均調達金利は、26bps上昇の0.88%となりました。

右側に円グラフで借入先別構成比を記載しております。

直間比率は直接33.7%、間接66.3%、

うち、三菱UFJ銀行からの調達比率は32.0%となっております。

また、金利動向の不透明な状況が継続していますが、

固定金利比率は79.6%、長期借入比率は91.0%となっております。

26ページ以降には、個人向けカードローン市場の規模推移、中期経営計画などを掲載しておりますので、ご参考にしていただければと思います。

以上が2026年3月期 第3四半期決算の報告です。

みなさまの変わらぬ「ご支援」「ご指導」を賜りますことをお願いして、私からの説明を終わりにいたします。ご静聴ありがとうございました。

質疑応答

Q1: 広告宣伝費の今後の見通しは？

A1: ○広告宣伝費については、LTVと獲得単価を確認しながら適切に投下している。今期は利益が上振れしているため、数億円規模で追加投下し、新規獲得を強化している。
○来期以降は、競合他社の動向も踏まえて、投下額を検討していく。獲得単価が徐々に上昇していることは認識しており、来期以降の広告宣伝費は増加する可能性がある。

Q2: 信用保証事業において、残高伸長のためにおこなった取り組みの成果について教えてほしい。

A2: ○他社事例なども活用しながら営業活動を進めており、社長の木下をはじめトップセールスもおこなっている。
○新規獲得は非常に順調で、残高も伸びている状況である。また、今期新たに提携した先についても、広告協賛金等をしっかり投下することで、計画通りに成果を上げている。

Q3: 不良債権比率が低下しているが、初期延滞についても改善が継続しているのか？

A3: ○初期延滞については、現時点で悪化の兆候は見えていない。債権自体は非常に良化しており、取引期間の短い顧客の構成比も低下していることから、今後も債権は良化していくと見ている。

Q4: タイでおこなわれている債務再編プログラムが与えるEASY BUYへの影響は？

A4: ○現状、買取債権の対象となっているのは銀行系の債権であり、ノンバンクの債権はまだ買取対象になっていない。このため、EASY BUY の債権についても現時点では買取の対象外である。
○将来的にはノンバンク債権の買取も開始される可能性があるため、どのような影響が生じるのか、引き続き注視していきたい。

Q5: お客さまの中で銀行系やノンバンクを併用している顧客がどの程度いるのか？また銀行系で徳政令の対象となった顧客は返済負担が軽くなるため、EASY BUY債権にもプラスの影響が及ぶ可能性があるのではないか？

A5: ○現状、当社では十分な情報収集ができておらず、銀行系の債権と重複している顧客がどの程度存在するのも把握できていない。今後、しっかり確認していきたい。

Q6: その他の営業費用の期末の着地見通しは？

A6: ○第3四半期時点で計画に対する進捗率がやや低い状況であるが、期末に向けて広告宣伝費の上振れが見込まれることから、その他の営業費用は最終的に計画を若干下回る程度で着地すると見ている。

Q7: 消費減税が与える御社への影響は？

A7: ○現時点では何とも言えないところであるが、使えるお金が増えれば消費意欲は高まり、資金需要も拡大する可能性があるかもしれない。

Q8: 利益の着地が計画を上回る場合、増配する可能性はあるのか？

A8: ○費用については、利息返還の取崩額および貸倒関連費用が想定以上に抑制できているため、期末の利益は計画を上振れて着地する可能性が高い。

○増配の考え方については、第4四半期に向けてしっかり検討を進め、しかるべきタイミングで検討結果を報告したいと考えている。

Q9: 不良債権比率が第2四半期比で上昇しているが、その要因は？

A9: ○第3四半期は12月のボーナスシーズンに返済が進むことで、分母である営業貸付金が減少する傾向にある。その結果、不良債権比率は第2四半期比で上昇した。

以上